

# 博士論文要旨

## 論文題名：近代中国ガス産業史の研究—上海市の事例—

立命館大学大学院経済学研究科

経済学専攻博士課程後期課程

タキモト ブンジ

瀧本 文治

本研究では、近代上海に事例を求め、中国ガス産業の史的展開を明らかにした。ガスは、社会の変化や近代化を考察する上で極めて重要な産業であるが、豊富な研究蓄積がなされてこなかった。断片的な紹介は散見されるものの、全くの未開拓分野であったと言える。したがって、本研究では、近代中国経済史・工業発展史における当産業の位置づけ、及び都市発展史における歴史的意義を考察した。本研究では主として、東アジアにおける最初のガス会社誕生から日中戦争期までの産業史を考察し、構成と内容は以下の通りである。

第1章「近代上海ガス産業の史的展開」では、外国資本による上海ガス事業への進出過程を考察した。1862年にイギリス租界内で設立された「英商上海自来火房」によって、租界内にガス供給が開始された。東アジアで初となるガス産業の端緒が開かれ、その後フランス租界内にも「仏商上海自来火行」が設立される。しかし、同社はわずか24年で消滅し、上海ガス事業において外国資本の競争が激化していたのである。英商上海自来火房は仏商上海自来火行のガス生産設備を購入して経営を引き継ぎ、英商上海自来火房が上海市のガスインフラ事業を独占していた。その後は、民族系や外資系のガス会社が誕生する事はなかったのである。近代上海における外国資本によるガス産業進出から独占までの過程の特徴として、イギリス資本が圧倒的優位を確立していたことが挙げられる。

第2章「東邦瓦斯株式会社の社史的考察」では、東邦瓦斯株式会社の設立背景と発展過程を考察した。東邦瓦斯株式会社の発展過程において、東邦電力株式会社との関係性は看過できなかった。つまり、両社の間には「電優瓦劣」とも言うべく当時のエネルギー部門を特徴づける序列があり、電力（東邦電力）とガス（東邦瓦斯）という社会経済の需要を反映した力関係が確立していたのである。かかる力関係は、上海においては更に顕著であった。東邦瓦斯は後に戦時期上海ガス事業にも関わるが、同社は戦時上海のガス事業において苦境に立たされ、日本式運営の限界と現地の主たる電気需要という難題に直面するのである。

第3章「戦時期上海のガス産業」では、日中戦争期に設立された大上海瓦斯株式会社の設立経緯と、会社事業の実態を考察した。大上海瓦斯株式会社は、日華合弁による維新政府の準特殊法人として、1938年12月27日に設立された。新参者の大上海瓦斯株式会社は東邦瓦斯株式会社との関係が強く、東邦瓦斯による内面指導という実態もあった。同社は上海瓦

斯株式会社（前英商上海自来火房）を圧倒することなく、低調な事業成績が際立っていた。そして、アジア・太平洋戦争期に入ると、大上海瓦斯株式会社は1942年3月24日に日本軍管理下にあった上海瓦斯株式会社の経営も委託された。1944年9月末の総需用家数は20,583戸で、そのうち19,196戸（93.3%）が前上海瓦斯株式会社の需用家であり、わずか1,387戸（6.7%）が大上海瓦斯株式会社の需用家であった。イギリス系ガス会社接收後に事業規模こそ増大したが、「電優瓦劣」の力関係を覆すことはなく、コークス等の副産物収入に頼らざるを得なかったのである。

補章「戦時期中国経済と日本語史料」では、占領地における企業経営の実態を把握する際に日本側の史料は如何にして扱われるべきなのか、その史料批判の視点・手法を『大陸会社便覧』を例に再考した。戦時期には虚偽の報告や数値など、扱いが非常に難しい情報が増え、こうした情報の限界性を認識しつつ、戦時期の日本語史料が有す価値を示した。ここでの考察を通じて、研究史上における本研究の意義は、以下二点にまとめることができる。

まず、「ガス産業」という近代中国経済史・工業発展史の新たな分野を開拓し、都市発展史における歴史的意義を考察したことである。ガス産業はこれまで主たる研究課題として扱われることがなく、未開拓の領域であった。日本のガス産業史と比較した場合、上海では日本に先駆けて事業が進展していたが、その後は規模が急激に拡大することはなかった。例えば、1944年9月末現在のガス需用家数は、わずか20,583戸であった。同時期の日本国内のガス会社と比較しても、その規模は日本における中規模程度の会社に過ぎなかった。ガスは、あくまでも租界内の外国人が主要顧客であり、中国人社会には広く普及しなかったのである。莫大な設備投資や提供価格、そして実際の生活における必要性などから見て、ガス産業は当時の外国人社会と中国人社会でそれぞれ異なるエネルギー需要を反映していた。また、こうした産業の特徴は、当時の中国社会における人々の合理的選択を顕著に物語っていたのである。

次に、上述の内容と関連して、近代中国経済史・工業発展史、そして都市発展史における「電優瓦劣」という関係性を明らかにしたことである。本稿でも明らかにしてきたように、ガス産業は民族資本の参入を見ることがなく、主に外国租界において外国資本が提供するサービスという、極めて限定した範囲内で展開されており、戦時期も日系企業はこうした地盤を大きく再編することはできなかった。こうした産業の特殊性のほかに、やはり当時エネルギー部門の王座を占める電力の存在は大きかった。電力供給が中国社会へ普及していく一方で、既述の通りガス供給は限定された地域に止まり、電優瓦劣という力関係は同時期の日本よりも更に顕著であった。社会の発展を牽引するエネルギー部門において、電力産業との関係性は、ガス産業史を明らかにすることで提示し得る貴重な視座である。本研究を通じて、近代中国経済史・工業発展史・都市発展史における電力とガスとの関係性を決定づけた意義は極めて大きいのである。